

武蔵國榛谷御厨谷庄之内神戸御神明濫觴之事

(訳・飯塚 充)

抑も当宮の開きは、天禄元年庚午の歳、伊勢の天照皇大神宮が飛來給い、武州御厨谷の庄の内、榛谷の峯に影向し、其より川井へ御飛あり、川井よりまた二股川へ御移り、御座所を仮宿と云う。二股川よりまた下保土ヶ谷の宮林と云う所に御影移り給いし間、同所の八坂と云う所に祝い奉りしところ、暫く住み給う。

嘉禄元年乙酉、或少女の託言に「吾れ法性真如都を出で、仮に分段同居の塵に交わつて以降、一天四海の跡に垂れ、卒土万国の光中に和し、なお当国当郡の和光に同塵し、一切の衆生を守護することを昼夜思ふなり。我れ鎮座を得る。」と云う。その時かの少女の二云うには、顔より淨き布を懸け御託宣を言われたと云う。

【御厨】 古代・中世、皇室の供御や神社の神饌

の料を献納した、皇室・神社所属の領地。古

代末には莊園の一種となる。神領。「広辞苑」

【神明】 ① 神。神祇。② 神のように明らかな徳。③ 祭神としての天照大神の特称。

④ 人の心。精神。「広辞苑」

【濫觴】 「荀子子道」其源可以濫觴(一)揚子江も水源にさかのほれば、觴を濫べるほどの小川である意)物の始まり。物事の起原。おこり。もと。「広辞苑」

【影向】 神仏が一時姿を現すこと。神仏の來臨。

【託言】 ことづて。伝言。

【法性】 「仏」一切存在の真実の本性。真如・実相。法界などと同義に用いられる。「広辞苑」

【真如】 「仏」ものの真実のすがた。あるがままの真理。「広辞苑」

【分段同居】 「仏」凡夫と聖者とが同じく居住する意で、娑婆世界をいう。「広辞苑」

【一天四海】 一天下と四海。あめのした。全世界。【率土】 (ソツドとも) 地の続く限り。国のはて。辺土。「広辞苑」

【和光同塵】 仏菩薩が本来の知徳の光を隠し、煩惱の塵に同じて衆生を救済すること。特に、仏が日本の神として現れる本地垂迹のことをいう。和光垂迹。「広辞苑」

【託宣】 神が人にのりうつり、または夢などにあらわれて、その意思を告げ知らせること。神に祈つて受けたおつけ。神託。「広辞苑」

「伊勢の神ここに飛びくるしるしには、

うつす御影をおかめもろひと」と

少女が様々に託し給いし時より、天は光り物は飛び散り、雷電が鳴り渡る。ゆえに今この所に祟め奉りしは、神明・御伊勢御正体と申す。下宮を造り、在所を神戸と号し、神宮寺を満福寺と名付け、経蔵堂を神照寺と称す。弘法大師御作の愛染明王ならびて今に御座す。これすなわち源信の本地を顕し給うものか。

末社は、雨宮・風三郎殿・切辺王子・日王子・高根明神・稻荷・天神・山王・見目などなり。つらつらこの地形^{じぎょうていたらく}為^な体^{たい}を見るに、伊勢国渡会郡の御本社^{ごほんしや}の靈地^{れいち}に少しも違^{たが}わず。先ず高間原^{たかまのはら}あり、これ宮原^{みやはら}と云う。宮川^{みやがわ}あり、これ神戸川^{しんごがわ}と云う。五十鈴川^{いすずがわ}あり、これ小帷子川^{こなひらがわ}と云う。御裳^{みもす}灌川^{そがわ}あり、これ戸部川^{とべがわ}と云う。大湊^{おおもなと}あり、ここを神奈川前^{かんながまえ}と云う。二見浦^{ふたみうら}あり、ここを宮崎^{みやざき}と云う。立石^{たていし}あり、ここを精進松^{せいじんまつ}と云う。神戸^{ごうど}・岩間^{いわま}相向^{あひむか}いて大橋^{おほはし}あり、ここを小帷橋^{こなひらばし}と云う。宇治橋^{うじはし}あり、ここを神戸橋^{しんごはし}と云う。そのほか外宮^{げくう}・内宮^{ないくう}・山田三方^{やまださんほう}・宇治^{うじ}・朝熊嶽^{あそまたけ}の景地に相似^{あいに}たり。肆法^{しほく}これしかりて勧請^{かんとせう}のところは自然^{しぜん}の宮立^{みやたち}の質^{しつ}なり。これにより、武蔵二十四郡の内十郡の守護神^{しゆごしん}、別^{わか}ては御厨谷^{みくりや}八郷の鎮守^{ちんしゆ}なり。ここにもつて、昔年^{せきねん}中は七十五度の祭祀^{さいし}ある由^{よし}。このほか五度の御供免^{ごくめん}あり。一・二・三・四の禰宜^{ねぎ}あり。神主^{かみ}あり。八乙女^{やおとめ}あり。三十五

【愛染明王】衆生の愛欲煩惱がそのまま悟りであることを表す明王。本地は金剛薩。全身赤色、三目六臂で忿怒の相をなし、弓箭などを持つ。

愛染法の本尊。後に恋愛成就の願いなどもかなえる尊格として、水商売の女性などの信仰の対象ともなった。「広辞苑」

【為体】①すがた。ありさま。②（後世は非難の意をこめて用いる）さま。「何という―だ」

【山田三方】伊勢の山田は、須原・坂・岩淵の三方に分かれていた。

【八少女】①八人の少女。②神に奉仕し、神楽などを舞う少女。「広辞苑」

人の社人あり。六口の供僧・女あり。かく上代は美々しくといえども、いま神領は没収せられるままに、その形ばかりなり。加様の旨趣を御上意様へ御申したてられ、先代のごとく社領に付けられ至れば、昔に相替わらず、奉幣・積奠を怠慢なく勤め奉り、天長地久の御願円満、殊には国主の武運長久・御威光倍增の旨、いよゝ祈み奉るべきものなり。よつて恐れながら神主等申し上げるところ件のごとし。

天文二十四乙卯年閏十月吉日

渡会氏朝臣

神主 在判

謹上

御奉行所

御申上

【**積奠**】(シヤクテン・サクテンとも)〔礼記王制〕孔子を祀る典礼。犠牲・蔬菜を供え、爵を薦めて祭る意。二月・八月の上の丁の日に行う。古代中国では先聖先師の祭礼の総称。後漢以後、孔子を祀る大典の特称となった。日本では、七〇一年(大宝一)二月丁巳に行われたのが

最初。室町時代に廃絶、のち江戸幕府・諸藩が再興、湯島や佐賀県多久の聖堂では今日も続けられている。おきまつり。「広辞苑」

【**天長地久**】「老子第七章」天地が永久に変わらないように物事がいつまでもつづくこと。「広辞苑」